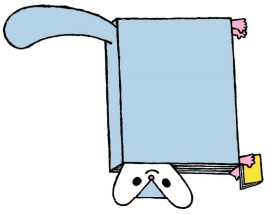
能登半島地震から学ぶこと



２０２４．　１．１５
美幌町図書館長
竹花　史康

　大きな震災と航空機事故ではじまった２０２４年、とても辛いスタートとなってしまいました。
　私たちは災害や事故で大きな被害を受けたあと、当然ながらその原因を追求し、対策を検討してきました。多くの教訓と科学技術の進歩により、いろんな事が災害のたびに改善され、一人一人の意識も高まります。
　しかし、大変残念なことに一度は高まっても、私たちは時間が経つと災害や事故への関心がいつのまにか薄れてしまい、防ぐことができるはずのものができないことも、ただ、あるように思えます。
　災害を図書館という立場で考えてみました。過去の災害から図書館における大きな課題は、「水」だと言われています。紙でできている本はいうまでもなく、「水にきわめて弱い」ということです。一度水に浸かった本は、ほぼ使用できなくなります。とりわけ問題となるのは、貴重な郷土資料です。それらの多くは、一度失ってしまうと二度と手に入らないものが多いからです。
　実際、２０１９年に発生した台風１９号では、浸水や雨漏りで書籍や資料が水に浸かるなど、被災した図書館は全国で１００以上にのぼりました。冠水して直接水に浸かっただけでなく、意外なことに木製の本棚が水を吸い込み、本をいためたという報告もありました。
　また、２０１１年の東日本大震災でも多くの図書館が被害を受け、散乱した本をもとに戻すのに何ヶ月もかかった図書館もあったようです。その後、地震でも本が落ちない工夫をはじめた図書館も増えています。
　美幌町図書館は、地理上浸水する危険性が低いこともあり、「水」に対する特別な対策はとられていません。それに、築５０年近い建物の耐震も心配です。
　今回の能登半島地震のように震度６～７クラスの地震で建物が壊れ雨漏りが発生するなど、貴重な郷土資料が危険にさらされることも想定しなければならないと、改めて考えさせられました。
　現在、建設時期はまだ未定ですが、新しい図書館に向けていろいろな視点で検討を行っています。そのなかに災害対策、特に「水への備え」についてしっかり検討していきたいと思っています。